

ウェールズ民衆教育の歴史

吉賀憲夫

Welsh Popular Schooling Norio Yoshiga

Abstract: Though Wales was a poor and rural country in Great Britain, Welsh people boasted a high level of literacy when compared to other eighteenth-century European countries. This level came mainly from effective popular schooling systems such as the Welsh Trust, the SPCK (the Society for Promoting Christian Knowledge) and the Welsh Circulating Schools in particular. These of systems were successful in achieving their educational goals despite facing political and religious difficulties such as the Jacobite Rising and the Schism Act of 1714.

初めに

ウェールズは英国の中でもたいへん貧しい地域であるが、そのようなウェールズが 18 世紀にはヨーロッパでも稀な高い識字率を誇るようになったのは、ウェールズ独特の学校制度によるものである。またウェールズ語聖書があり、それが教材として利用されたことも、ウェールズの民衆教育にとって幸いであった。一方、ウェールズの民衆教育の試みに影を落としたのは、ジャコバイトの反乱や 1714 年の宗派分立禁止法といった政治的、神学的対立であった

上層階級の子弟の教育機関としてのグラマー・スクールは、ジェームズ一世 (James I, 1566-1625) の時代には、ウェールズにも 10 校以上あったが、一般庶民の子弟を対象にした組織的な学校がウェールズに創設されたのは、清教徒革命後のことであった。これらの学校は、1650 年から 1653 年にかけて議会を通過した「ウェールズにおける福音のより良き普及のための法令」により設立された無料の初等学校であり、40 校から 60 校が開設された。しかしこれらの学校も王政復古とともに 1660 年にはすべて廃止されてしまった。

ウェールズ基金

ウェールズにおける無学克服運動は、ウェールズ基金 (Welsh Trust) により引き継がれた。このウェールズ基金とは、1661 年から 1665 年にかけて制定されたピューリタン・非国教徒弾圧立法であるクラレンドン法典で聖職から追放された二人の元牧師トマス・グージ (Thomas Gouge, 1605?-81) とスティーヴン・ヒューズ (Stephen Hughes, 1622-88) が、ピューリタンの商人の援助や、広教会派の主教の庇護を得て設立したもので、ウェールズの貧しい子供たちに、広く

教育を施すことを目的とした。

ウェールズ基金は、ウェールズに 80 以上の学校を作った。一つの学校には、平均約 20 人の生徒が学び、ウェールズ基金により支給されたウェールズ語の聖書や宗教文献を教材として使った。教材はウェールズ語で印刷されたものを使ったが、読み書きの授業と教理問答の授業は、生徒が英語を覚えるようにと、英語で行われた。しかしこの方法は、英語を知らない北ウェールズの子供たちには、十分な教育効果をあげることができなかった。

1675 年頃までには 80 以上の学校がウェールズの主要な町に作られたが、人々の間にウェールズ基金がピューリタニズムの復権を狙っているのではないかという疑惑が広まったため、1678 年には 38 校に減少してしまった。最終的に 1500 人以上の子供たちが、これらの学校を卒業したと考えられている。しかし、1681 年のグージの死後、ウェールズ基金の運動は急速に衰えていった。

SPCK (キリスト教知識普及協会)

ウェールズ基金の活動が終わると、1699 年に設立された S P C K (Society for Promoting Christian Knowledge) が後に続いた。S P C K はイングランドでは貧民教育に長い歴史を持つ英国国教会を中核とする団体であった。S P C K は、ウェールズ基金と同様に、学校を作り、ウェールズ語聖書やウェールズ語の宗教文献を配布し、貧しい子供たちを教育した。1727 年までに約 100 の学校が作られた。またウェールズ語が主として話されている北ウェールズ地域では、ウェールズ語で教育を行った。しかし、それらの学校では生徒の農作業の手伝いや物乞いで出席率が悪かった。

SPCK も政治的、神学的対立で悩まされた。1714 年の宗派分立禁止法により、国教徒以外のものが教師として教えることができなくなり、また学校を経営することもできなくなった。SPCK はジャコバイトを支援しているのではないかという憶測から、1715 年のスコットランドでのジャコバイトの反乱以後、多くの支援者や援助者を失った。

巡回学校

1750 年ごろ、ウェールズの学校教育の現場に画期的な教育システムが導入された。カーマーゼンシャー出身のグリフィス・ジョーンズ(Griffith Jones, 1684-1761)という SPCK の学校で教職歴のある聖職者が「巡回学校」(Circulating Schools)というものを考えつき、それを実行に移したのである。この巡回学校とは 3 ヶ月ごとに場所を移動して開設される学校のことであった。

この巡回学校は、生徒の出席が困難な夏の収穫期を避け、農閑期にあたる 9 月から翌年の 5 月まで開校された。またその間、3 ヶ月ごとに、教区から教区へ移動し、さらに一定の期間において、巡回学校は同じ教区の別の場所に戻ってきたのであった。巡回学校では、昼間は子供たちに SPCK により支給されたウ

ウェールズ語聖書や祈祷書を使って読み方が教えられ、1日に2回、教理問答も行われた。それ以上のことは何も行われなかった。

この巡回学校のもう一つの特徴は、同様の教育が成人を対象に、夜間にも施されたことである。このように夜間に開講することで、労働のため昼間に出席することのできない成人に教育の道が開かれた。これらの成人たちは、暖をとる燃料や、手元を照らすためのローソクを持参し、夜の授業を受けたという。3ヶ月という期間中に、生徒が自力で聖書を読めるようにするという単純明解な目的を持った巡回学校は大成功を収めた。

ウェールズ語で教える利点は、教育効果もさることながら、予算面にもあった。巡回学校の教師の給料に関しては不明の点も多いが、それは1学期3ポンド5シリングとも、2ポンド7シリング以下とも言われている。これは英語で授業をする SPCK の教師が最高8ポンドであったのに対し、半額以下であり、かなり低いと言える。しかし巡回学校の教師の給料が安い分、より多くの教師を雇うことができ、その結果、より多くの生徒を教えることができたのであった。そのようなわけで、巡回学校では1ポンドで6人の生徒を教育できたという。またこれらの巡回学校の教師は、かつて巡回学校で学んだ生徒であり、かつ巡回学校教員養成校で教師としての教育をグリフィス・ジョーンズから受けた者たちであった。それゆえ、彼らは喜んでこの安い給料で、教育という高邁な目標に邁進したのであった。

巡回学校では幾人かの女性の校長も雇われた。また少なくとも28人以上の女性が巡回学校で教えたといわれる。そしてその中の4人は英語で授業を行ったとある。英語が話されている地域では、授業は当然英語で行われる必要性があることをグリフィス・ジョーンズは認識していたのである。

このように巡回学校はウェールズ語教育ということで大成功を収めた。グリフィス・ジョーンズが死去した1761年までに3325校が誕生し、成人を含め約15万8000人の生徒が巡回学校で教育を受けたといわれる。18世紀中葉のウェールズの人口は48万人程度と推定されるので、巡回学校で教育を受けた生徒数だけでも16万人に近いとすれば、それだけで当時のウェールズの識字人口のかなりの部分を占めることになり、従って、ウェールズの識字率は当時のヨーロッパの国々と比べてもかなり高いものとなった。しかしウェールズの民衆教育に多大な貢献をなした巡回学校も、18世紀末にはその使命を終えた。この巡回学校での、聖書を読み、教理問答を行うという基本的な2つの教育方針は、19世紀の日曜学校に引き継がれていくことになる。